

T-PASで
実感する
体験型研修
の実際③
特別編

日本慢性期医療協会

いま、慢性期病床でも患者の急変対応が求められている。日本慢性期医療協会では、突然起こりうる急変時に的確な対応が行えるよう「慢性期ICU看護レベルアップ研修」を実施している。全国の慢性期病院の師長や主任レベルの看護師が集まり、テルモメディカルプラネックス(神奈川県足柄上郡中井町)で行われた1泊2日の同研修の様子を紹介する。



臨場感あふれる 「慢性期ICU看護レベルアップ研修」で 患者の急変に備える

急性期治療を終了した患者が次に向かうところは慢性期病床である。在院日数が短縮されるなか、2025年には医療を必要とする患者757万人のうち90%を慢性期医療が受け持つことになるといわれる。慢性期病床で高度急性期治療後の急変リスクがある患者を受け持つことになるため、集中ケアも行える機能の拡充が求め

られている。こうした背景をふまえて、日本慢性期医療協会では、慢性期病床の看護師を対象とする急変時のシミュレーション研修「慢性期ICU看護レベルアップ研修」を行っている。

「慢性期病床の看護師さんは、技術はありながらも、「急変患者をみられない」と感じているようです。そこで、高度急性

期治療のシチュエーションを体験し、いざ現場で急変が発生したときパニックに陥ることのないようにと考えました」と話すのは、研修を企画した富家病院理事長・院長の富家隆樹氏。

“急変時対応のストレスを味わう”ために、最新設備を備えて実際の臨床現場を再現した研修施設、テルモメディカルプラネックスのホスピタルスタジオで実施され、4回目を迎える。

「ファシリテーターはいても、答えはありません。参加者が6人ずつのチームに分かれて2日間で5つのシミュレーションを体験し、撮影した動画を見て自分たちだったらどうするのか、本当はどうすべきかをディスカッションします。たとえば、患者説明を行う場面では、患者役に“医療ミスよね!”とつめ寄られるなど、ストレス度の高い研修です。しかし、全国から同じような立場のスタッフが集まるので、1日目の夜の懇親会などでさまざま

●プログラム例

病棟における急変対応

病棟において重症患者が急変した状況下で適切にアセスメントし、対処できるか

病棟における多重課題

病棟において、複数の患者の状態変化が同時に起きる状況下で、安全で的確な対応が対処できるか

在宅における緊急対応

訪問看護時での不測の事態に適切な対応ができるか

急変した患者の家族対応

患者家族に対して、患者急変時の対応および処置についてわかりやすく適切な説明をすることができか

フィジカルアセスメント

患者の状態を確認し、疾患名を予測したうえで、確定診断にはどのような検査が必要かを予測できるか

スキルトレーニング

ハイムリッヒ法、吸引、輸液ポンプなどの手技

参加者は上記のプログラムを体験。前回の研修参加者が患者役に扮し、プログラム全体を外側から把握できるように構成されている



研修コーディネーターの内田病院・特別養護老人ホームくやはら理事長の田中志子氏



1泊2日の研修に全国から参加者が集まった

●慢性期ICU看護レベルアップ研修参加者



永生病院
安西真由美さん



富家病院
高橋久美子さん



内田病院
小池京子さん

●患者役に扮した前回の参加者



永生病院
高野啓子さん



富家千葉病院
星野昭恵さん

まな情報を交換ができることもあり、実りの多い研修だと思っています」

プラスのストロークを投げる

「病棟によっては、急変の種類がかぎられてくるので、いつもと違う内容の急変対応が行えることに意味があります」と話すのは、内田病院・特別養護老人ホームくやはら理事長の田中志子氏。ストレスがかかる場面を体験することで、日々のモチベーション向上につながることも期待する。

研修に参加した永生病院の安西真由美さんは、「急変対応は日常茶飯事ですが、今回、知らないスタッフとチームを組んで対応することで、ふだん味わえないような緊張感や発見がありました」と話す。また、研修の特徴である“プラスのストロークを投げる”という、否定せず前向きなコメントを返す姿勢を評価する。

「日々プライドをもって仕事をしているので、できなかったことには、かなり敏感になりますし落ち込みます。しかし、皆さんの温かいコメントに救われ、その

ことをうれしく感じます。自分たちのふだんの業務を振り返る意味でも貴重な体験でした」

富家病院の高橋久美子さんは、施設の充実度と、役になりきった俳優さんながらの名演に、「自分もすんなり入り込んでリアルなシミュレーションが行え、振り返って学ぶことができました」と話す。緊張やプレッシャーはありながらも、85分の1プログラムはあっという間に終わってしまうという。

「追いつめられた状況ではグループのメンバーと連携して対応することが必要で、臨床現場で新人スタッフが緊張するタイミングや、フォローが必要な場面が実感できましたし、今後の指導にも役立つと感じました。リアルにその世界を体感することで、座学の講義や書籍・ビデオなどとは違った理解が得られます。わかった気になっていますが、実際にやってみるとできないこともありますので」

内田病院の小池京子さんは、この研修のうわさを以前から聞いていたという。

「研修に参加した先輩たちが“すごいプ

レッシャーを与えられて、2日間へこむし地獄だけど、最後は楽しいよ”って笑いながら言っていました。だから、直前までかなり緊張していましたが、実際参加してみると楽しかったです。それも、テルモのスタッフの方を含め皆さんがシチュエーションをリアルに再現してくれたことや、振り返りではほめて評価してくれたおかげだと思います。新人スタッフがパニックになる多重課題の状況をそのまま再現していて、改めて自分は動けるのか考えさせられて、よい振り返りの機会になりました」

第三者の目で

業務の振り返りができる

この研修には以前の参加者が患者役として参加し、患者役を務めている。

「“無我夢中で気がつかなかった研修の意図がみえた”とおっしゃる方もいますが、実は、急変対応を外側からみることで発見し学ぶことも大きく、患者役になって初めて、この研修は完結するともい



多重課題シミュレーションの様子。別のチームが様子を見守る



終了後、録画した映像を見て再確認する

●参加者の感想(アンケートより一部抜粋)

初心に返ることができた

現場と違った感覚のなか、とてもいい経験だった。申し送り→配信の時代なので、自分なりに情報収集できるようにならなければならないと思った

病棟でのチームとしての役割分担は重要であり、部屋持ちナースが状態の観察などをリーダーナースに的確に報告することが必要だと感じた

パニックにならずに冷静に行う必要がある



在宅緊急対応シミュレーションの様子をガラス窓の外から見守るベアチーム。内側から外を見ることはできない

終了後に気がついた点をあげる。「プラスのストロークを投げる」ため、できたことと、あともう一步の課題という視点で前向きに指摘しあう



えます」と田中氏。

患者役として参加した永生病院の高野啓子さんは、前回参加したときに圧倒された演技をまねて、リアルさを心がけたという。

「患者さんの急変で呼ばれた家族によるクレームという場面で、なりきって机を叩きながら大きな声でどなって、怖いと言われました(笑)。前回参加したときは、もっと動けるはずと思っていたのですが、映像で確認すると棒立ちになっていたりして、初めて会った人と一緒に最新鋭の設備が整った環境で動く難しさを感じま

した」

富家千葉病院の星野昭恵さんは、「チームワークの大切さを実感することができました。今回、上司や患者になって、第三者の目で看護師をみて、私たちの指導がいかに重要なのかを学べました。病院の規模や役職など似ている境遇の参加者が多かったので、有効な情報収集もできました。交友関係も広がりましたし、全国でみんながんばっているんだなと刺激になりました」と話す。



「自分ではできるはず」と思っていたこと

が、覆されるのが体験型の研修だ。臨床現場では、急変時の対応のみならず常にさまざまな事象が起り、柔軟な対応が求められる。わかっているつもりでの行為がインシデントやアクシデントに結びつくこともあり、それを理解しておくことがとっさの対応力を磨き、事故防止にも結びつく。

そのような医療機関、スタッフのニーズに応えるさまざまな研修を、テルモ株式会社では提供している。今回の研修が行われたテルモメディカルプラネックスのような「場」はもちろんのこと、T-PAS研修*をはじめとした、体験を伴う「情報」を、要望に応じていろいろとアレンジすることも可能であるという。

「一生懸命やっても、いつ自分たちにアクシデントが降りかかるかはわからないことです。いざという時のために、避難訓練のような体験が非常に大事なのです。今日の経験を現場に持ち帰り、ふだん自分が行っている指導内容をブラッシュアップすることに役立ててほしいと思います」と田中氏は研修の有効活用を促した。

●日本慢性期医療協会 研修委員からのメッセージ

近年、慢性期病床では、急性期病院での治療を終えて間もない状態の患者さんを受け持つ機会が増加しています。胃瘻や気管吸引、酸素吸入、人工呼吸器などが必要な患者さんは、もしかしたら一般病床より療養病床のほうが多いかもしれませんし、中心静脈栄養の患者さんはほぼ同等といわれています。

つまり、慢性期病床の看護師さんは患者さん

の急変と隣りあわせにいるのです。

研修参加者は師長や主任の方々ですが、こうした意識の高いスタッフが集まったとき、誰も思ひもしなかった新しいシナジー的な答が生まれることがあります。それがなんとも言葉にできない、新鮮な体験になると思っています。実際に参加した当院のスタッフからも評判がよく、手応えのある研修です。

研修を行うなかで 新たな答が 生まれることに期待

富家病院理事長・院長
富家 隆樹氏



どんなケアが必要か 見極めて対処すること



脳血管研究所
美原記念病院病院長
美原 盤氏

慢性期の看護と急性期の看護は同じではありません。健康な人が病気になり、それが治るのが急性期、でも、慢性期の場合はすでに脳卒中や認知症など、さまざまな病気をもっていて、そのうえでさらに新たな病気をもった場合、必ずしも治癒するわけではないからです。治らないことを前提として、どこまで治療が行われケアするかという判断が重要です。

そこでは、急性期で行われる知識と技術はもちろん必要で、そのうえでさらに患者さんがかかえる複数の病態、患者さん自身の知的レベルや尊厳、QOLを考慮してよりジェネラルに患者さんを見て寄り添うことが求められると思うのです。

この研修が、そういったことを改めて考えるきっかけになるとと思っています。

*T-PAS研修：シリンジや輸液セットといった汎用医療機器による事故を防ぐために、添付文書に記載された注意事項のうち、発生する頻度や危険度が高いものを体験して理解する教育プログラム。詳細については、テルモ株式会社へお問い合わせください